

〈私の書評〉

スタンレー・カーノウ著

風間 龍児
中原康二訳

「毛沢東と中国」



中 なか 嶋 じま 嶺 みね 雄 お

東京外国語大学助教授

中国の文化大革命は、壮大な夢と深い傷を残して、いつしか凋んでいったが、二十世紀後半の歴史的ドラマとしては、たしかに第一級のものであった。今日でも、公式には、文化大革命の路線は引きつがれており、そのことは先の中国共産党十全大会によっても確認されてはいる。だが言葉としての文革路線のせん明にもかかわらず、実態としての文化大革命は、二度と再び生起することのない歴史的ドラマの残像でしかなくなってしまった。こうして中国は、すでに一つの時代を終りつつあるのだが、この

「世紀のドラマ」の全体像はいかにして言葉に再現し、記録にとどめ得るのか。つねに状況の推移によって評価がうつろう中国の内部においてはそれが当面は不可能であ

るかぎり、外部世界の観察者がそれをたさねばならない。

長い間の中国観察者として、とくに文革の激動期をばさんで十年間も香港に特派員生活を送った『ワシントン・ポスト』のジャーナリストである著者は、おそらく右のような使命観と情熱と執念をもつて、このドラマの再現と記録にとりかかったのであろう。本書は、その野心的な成果であり文革の全貌をはじめ、内的的にとらえきつた長大なドキュメントである。著者は、みずから、「これは、国との衝突を行なった一人物に関する書物である。その人物とは毛沢東であり、その国とは中国である」と語っているが、著者は、中国という伝統的世界を独自の革命的世界として完結させ

ようとした毛沢東の生涯を、文化大革命をとおしてふりかえり、「彼の成功のなかには、根本的な失敗の種子が播かれている」ことを同時に指摘することに成功している。

訳書の上巻では、まず中国近代化運動の光と影のなかに登場した毛沢東の個性的な歩みにスポットがあてられているが、なんといっても上巻は、本書の大半を占める上巻後半から下巻にかけての文化大革命の記述である。著者は、文化大革命とはなんであったのかを定義したり、文化大革命を総括したりすることを敢えて避けながら、この激動の時代をたんねんに、しかもドラマチックに再現し、文革の息づきとそのリアリティーを伝えることに成功している。そのため、きわめて数多くの資料や著作を利用して書かれたのだが、本書には、アメリカの中国分析のすべてのファイルが集められている観があり、香港のアメリカ総領事館が出している「サーベイ・オブ・チャイナ・メインランド・プレス」(SCMP)がふんだんに用いられているのをはじめ、紅衛兵資料などの中国内部の非公式な資料や地方放送なども随所にとりいれられてい

る。そのような材料の積み重ねによる精力的な記述のなかで、たとえば中国共産党の創立者の一人でもあった武漢大学学長の李達が、武漢事件の直前、紅衛兵の攻撃の犠牲となって死んでいったこと、陶鑄失脚の原因として彼が「太陽にもまた黒点がある」といって毛沢東を批判したことなど、私自身にとっても未知の事実が語られている。劉少奇夫人・王光美にたいする紅衛兵の攻撃の場合も、これまでの紹介よりもリアルである。このように全般的に、きめ細かくしかも迫力のある記述になっているが、とくに広東省の情勢に詳しいのは、やはり著者が香港に長くいたからである。

本書に序を寄せているジーン・K・フニ

アバンク教授は、著者について「ダンス時代のいくつかのイデオロギー的言辭や、中国的なものすべてをすばらしいとみる中国専門家たちの謬見に対しても、免疫であった」と述べているが、このような著者の公平な立場は、本書でもいかに発揮されており、著者の中国認識の着実さのゆえに、ハーバード大学の東アジア研究センターは、著者の仕事に支援を与えたのであって、本書がこうして、ジャーナリズムとアカデミズムの接点において成ったことの意味も大きいであらう。

最後に、一、二の問題点を指摘するならば、林彪異変の解明は、本書脱稿の時点での資料的・情報的制約もあってかまだまだ手薄であるように思われ、この点は、今後

に期待するところ大である。そして、著者の毛沢東観についていえば、「毛沢東の失望の深さは、彼の見果てぬ夢の次元の大きさの反映であるのであろうか」という著者の結びの言葉にもあらわれているように、彼の夢ははぐくむべき豊かな可能性を洞察しながら、同時に、その夢が果たされ得ない中国の厳しい政治的・社会的現実を見ぬいているが、毛沢東の夢想が中国民衆の人間の変革にまで真につながるものであるのかどうか、この点での著者の見方は、いささか、情急的でありすぎるような気もする。

(上)三三六頁
各二四〇〇円 時事通信社
(下)四〇六頁

慶応義塾大学
法学研究会叢書

松本三郎著

一八〇〇円

中国外交と 東南アジア

増刷出来

中国の東南アジア政策——その政策の基調。中国と北ベトナム。ラオス政治史と中国の外交政策。中国と東南アジア諸国の国境問題。中国とベトナム。ラオス。中国とビルマ。中国とヒマラヤ。中国とインド。中国とパキスタン。中国とアラブ。中国の対中国政策とその中国観と政

内山正熊 ¥1600
現代日本外交史論

英 修道 ¥2900
外交史論集

利光三津夫 ¥1500
律令制とその周辺

利光三津夫 ¥2400
続 律令制とその周辺

〔発売元〕
慶応通信

東京・三田 2-19-30
TEL (451) 3584
図書目録呈